

僕は親子井を御馳走になつて歸りに、神田の佛教會館へ廻つて、何日が會場があくかとか、借賃は幾何だとか聞いたたりした。

酒井と言ふ人が、青年會館でしあさつて絶對性原理の講演會をやる立札が出てゐた。

僕はお茶の水の橋を渡つて、砲兵工廠の横を通つて戸塚まで歩いて歸つた。

途中遇ふ人毎に、僕は自分もやるから聞きに来て下さいとか、僕はダ、イズムの話をしませうかとか言つて、丸善の支店の硝子戸をあけて、中に居る人みんなに聞えるようにオランどり、東京堂の小賣部の表で、同じように叫んだりした。

僕の顔は引きつるような冷靜を装ほふてゐても、頭は熱かつた。

雨が少し降り出してゐた。

暗い戸塚の場末の、穢い居酒屋のノレンをくぐると、袴を穿いた男とインパネスを着た男が腰掛けて飲んでゐた。

アインスタインは馬鹿だ。

僕はぐつたりして、カンピンを持つて僕を擲ろうとした袴を穿いた男に、肩を突き飛ばされて